

「点数・学位売ります」 —カザフスタンの教育機関における不正とその構造—

岡 奈津子

カザフスタンで聞き取り調査をしていたときのこと。長年、腐敗削減にとりくんできた弁護士ヴィターリー・ヴォロノフ氏が、筆者にこんなエピソードを披露してくれた。

「あるとき、僕の運転手がA大法学部の卒業証書をカネで手に入れた。わざわざみせびらかしたので、ちょっとからかってやろうと思ってね。その卒業証書にはちゃんと大学の公印が押してあったんだが、僕は『君はだまされたね。本物なら顔写真がついているはずだ』っていつてやった。週明けに彼がいうには、僕の冗談を真に受けて、卒業証書売りつけた奴をみつけ出して一発お見舞いたそうなんだ」

中央アジアの資源大国カザフスタンは、国の将来を担う若い世代

のエリート教育に力を入れていく。国費留学制度「ボラシヤク(未来)」が創設されたのは、独立後間もない、経済的にもまだ大きな困難を抱えていた時期だ。二〇一〇年には大統領の強いイニシアチブのもと、彼の名を冠したナザルバエフ大学が首都アスタナに開校し、全国から集まった優秀な学生たちが学んでいる。世界中から招かれた教授陣が行う授業はすべて英語だ。ちなみに学長は日本人(元世界銀行副総裁の勝茂夫氏)である。

その一方で、多くの大学や学校では、成績や試験の点数、学位論文をカネやコネで手に入れる行為が横行している。なぜ不正が蔓延しているのか。本稿では、筆者の聞き取り調査をもとに、その実態と、不正を生む構造について考え

てみたい。詳細は割愛するが、調査時期は二〇一〇〜一四年、引用したインタビューのうち場所を示していないものは、アルマトウ(カザフスタン東南部に位置する同国最大の都市)で実施している。



ナザルバエフ大学 (筆者撮影)

●不正の蔓延

学校教育の現場における不正はどの程度深刻なのか。やや古くなるが、カザフスタンの民間調査機関が二〇〇六年秋に実施したアンケート調査を紹介しよう。この調査は、過去一年半の間に公的機関とかかわりを持った人を対象に、「非公式なサービス」を受けたかどうかを尋ねたものだ⁽¹⁾。サンプル数が少ないため参考程度に留めておくべきだが、この結果をみると、国立大学では回答者全体の実に四〇%が、奨学金の獲得や科目試験などで不正な手段を使ったと答えている。また、学校(一一〜一学年までの一貫校)⁽²⁾については、特定校への入学、卒業成績などが事例として挙げられており、こうした目的のために非公式に便宜を図ってもらった人が全体の一九%となっている。

最近では、驚愕するような事実も発覚している。カザフスタン西部に位置するマンギスタウ州で、法務省の調査機関が一九九〇〜二〇〇〇年代に卒業証書を取得した学校教師二一〇〇名を調べたところ、なんとそのほぼ九割が実際には大卒資格を持っていなかったという。その二七教師たちが買った

卒業証書は、カーププリンターで作成され、地下横断歩道の売店で売られていたものだというから驚きだ⁽³⁾。

教育機関の腐敗については、政治家も警鐘を鳴らしている。ダリガ・ナザルバエヴァ下院副議長は、国会の高等教育特別調査委員会報告を受け、次のように発言した。

「あらゆるレベルの教育において、腐敗がシステムティックな問題になっていることを認めなければなりません。生徒たちの学習意欲が低いのもそのためです。生徒たちは、試験問題を自分で解くより買うほうがいいと思っています。コレッジ⁽⁴⁾や大学に若者が行くのは知識を得るためではなくて、卒業証書をもろうためです」⁽⁵⁾

教育分野における不正の蔓延は、カザフスタンのみならず旧ソ連諸国の多くで深刻な問題となっている⁽⁶⁾。その原因としては、ソ連解体後の教育予算の大幅な削減、教師の給与カットなどの経済的要因がしばしば指摘される。とくに、収入が不十分だと収賄に手を染めやすいという説明は、教師に限らず、公的機関に勤める職員
の腐敗に関するもっとも一般的な定説だ。

しかしカザフスタンの学校・大学における贈収賄は高度に組織化されており、教師の給与や学生の学習意欲といった、個々人の事情や態度だけで十分に説明することはできない。本稿では、教育分野の不正が教育機関のみならず、行政機関をも含めたピラミッド型の腐敗システムによって生み出され、再生産されていることを指摘したい。このシステムのもとで、贈収賄、口利き、公職売買といった不正行為はルール化され、多くの人々が熟知し実行する、ある種の規範となっている。教育分野の不正は、社会全体にみられる腐敗と共通の構造を持っているのである。

●試験解答は先生に聞け

カザフスタンでは毎年六月、学校卒業予定者を対象とした全国統一試験（ENT）が実施されている。ENTの結果によって大学の入学資格が決まるため、受験生もその親も、この時期になると少しでもよい点をとろうと必死だ。希望校に進学できるかどうかがかかっているのはもちろんだが、ENTで良い点をとれば奨学金（grant）の受給資格が得られ、

授業料が国庫負担となる。カザフスタンでは昨今、高等教育の学費が急騰しているため、平均的あるいはそれ以下の収入の家庭にとつて、奨学金をもらえるかどうかは重大な関心事だ⁽⁷⁾。

「ENTの答えを事前に教えてもらえると聞いて、私たち親は大喜びしたんですよ」

図書館員のラウシヤン（以下、敬称のない固有名詞はすべて仮名）は、彼女の娘が最近、ENTを受験したときのことを話してくれた。ある日の夕方、校長と教務主任が最終学年の生徒全員の保護者を呼び出し、カネを出せば事前に解答を教えると申し出た。親たちは、なぜ入手できたのかをいぶかったり、教育者にあるまじき行為だと憤慨することもなく、校長の要求に応じた。しかし、わが子のためを思って賄賂を払った親心は裏目に出た。校長からもらった答えは実際に出題された問題に対応しておらず、その暗記に時間を費やした生徒たちは、試験で低い点しかとれなかったのだ。

アルマトゥ市から東に五〇キロ、ボレック村にある学校で校長を務めるグリザダ・アフメトヴァ氏は、ENTのカニンングペー

パーが公然と出回っている、と嘆息する。下級生の受験勉強のため、試験を終えた生徒から使用済みの試験問題を集めたところ、問題を解こうとした形跡はまったく無いのに、すべて正しい解答が記入されたものを発見したこともあるという。ENTに関する情報は国家機密扱いで、国家保安委員会が厳重管理しているはずなのだが、流出を完全に防ぐことはできていないようだ。

試験中の不正行為には、しばしば教師が関与している。アフメトヴァ氏によれば、トイレ休憩を利用して、試験会場の外に待機している教師に電話やSMSで答えを聞いたり、トイレに付き添った教



アフメトヴァ校長先生と入学予定の子供たち
(写真提供：グリザダ・アフメトヴァ氏)

師に教えてもらったりする。また、試験中に試験監督が生徒の脇に立って手伝うことすらあるという。携帯の持ち込みを見逃してもらったり、制限回数を超えてトイレに何度も行ったり、解答を教えてもらったためには、もちろん袖の下が必要だ⁽⁸⁾。

それにしても、あまりにも露骨ではないだろうか。「もちろん、そうした不正行為を目標した生徒たちは抗議してきますよ。ネットでもたくさんの苦情が書き込まれています。だけれだけの横で先生が答えを教えていたとか、一〇回もトイレにいった子がいたとか、三つも携帯を持ち込んでいたとか。なかにはシヨックを受けて泣き出す生徒もいます。『私は答えを教えてもらっていないのに、あの子は教えてもらっていた』と」

ENTの不正が学校ぐるみで行われる背景には、教育関係者へのプレッシャーがある。生徒たちの点数が悪いと教師や校長、さらにその学校がある行政区の教育局が責任を問われるので、役人は校長、校長は教師に、結果を出せと圧力をかける。そのため、なかには不正をしてでもよい点をとらせ

ようと、教師自らカンニング用紙や携帯電話の使用を黙認するところもあるという。複数の教育関係者に聞いたこと

だが、ある地方の村では受験生全員が一二五満点のうち一二〇点をとり、スキャンダルになった。あまりに不自然だということでも再試験をしたところ、結果は平均点より低かったという。

通信教育コースは、とくに贈収賄が蔓延していることで知られている。仕事で忙しい学生たちはつとより早く卒業資格を取ろうとし、教師たちもそれをよく承知しているからだ。「『五』（五段階評価の最高点）なら五〇〇〇テンゲ、『四』なら四〇〇〇テンゲだった」⁽⁹⁾。これは教師本人が申し出た賄賂の金額である。期末試験前、ハミットは「お前はなんで（賄賂を）払わないんだ？」と聞かれ、「お金がありません」と答えたところ、その教師の科目が不合格となった。ハミットは再度、試験を受けなければならず、本人曰く「四〇〇〇テンゲをけちったばかりに」、追試代として大学に（公式に）二万七〇〇〇テンゲ払うはめになった⁽¹⁰⁾。

●成績も力次第

大学における贈収賄には、「級長 (starosta)」と呼ばれる学生が重要な役割を果たしている。この「級長」は一般学生と教師の仲介役で、教師が求める賄賂の金額や、成績の「購入」を希望する学生のニーズを把握しており、賄賂の受け渡しも、しばしばこの「級長」を通じて行われる。教師にとっては学生と直接接触しないで済むため、安全かつ便利なシステムだ。ただし、学生と教師が直に交渉するケースも珍しくない。

二〇代後半の白タク運転手ハミットは、働きながらK大の通信教育コースで学んだ。彼は当時すでに結婚して子供もいたので、家族を養わなければならなかったからだ。こうした主に社会人対象の

ず、日本製の食器セットを一万五〇〇〇テンゲで買い、教師にプレゼントした。何を贈るかは母親と相談して決めた。「（賄賂の）相場は知りませんでしたね。知ろうと思えば人に聞けたけれど、値段を調べたら必ず高くなるし、仲介者にも（謝礼を）渡す羽目になる。それにお金だと消えてしまうから、きれいに包装したプレゼントのほうが効果的だと思ったんです」アレクサンドルは主任教師のところに行き、どの科目のテストの準備ができていないかを正直に話して、助けてもらえないか頼んだ。彼が食器セットと引き換えに得たのは、四科目分の成績であった。相場は知らなかったというアレクサンドルだが、結果的に彼が賄賂に使った金額は、ハミットが教師に提示されたものに近かったことになる。

二〇代後半の白タク運転手ハミットは、働きながらK大の通信教育コースで学んだ。彼は当時すでに結婚して子供もいたので、家族を養わなければならなかったからだ。こうした主に社会人対象の

この場合は、賄賂を一括して受け取った教師がそれを同僚に分配し、どの学生が支払ったのかを伝えるのだという。ハミットとほぼ同い年のアレクサンドルが渡したのは、現金ではなく物である。彼はフルタイムの学生だったが試験勉強に身が入ら

た。九〇年代後半に大学で学んだマリナは、テストはすべてきちんと受けたが、ひとつだけ合格点に達しない科目があった。そこで

彼女の母親が大学関係者（マリナーの推測では学部長）に渡したのは、鶏肉と卵であった。母親の勤務先が鶏卵工場だったからだ。マリナーは笑いながら両手を大きく広げてみせた。

「母はこんなに大きな袋に詰めもっていったんですよ」

それにしても目立ちすぎでは？
「当時はみんなそうやっていたから。（賄賂代わりの品物を）キャリーバックに入れて持ち運んでいるのはよくみかけました」

労働力の提供という方法もある。筆者の知人男性によると、九〇年代に彼が勤めていた地方大学では、自家用車による送迎、郊外のセカンドハウスでの肉体労働などと引き換えに、授業を欠席した学生に単位を出す教師も珍しくなかったという。

●口利きも有効

単位取得には大学関係者のコネも役に立つ。国立大学教員のデイナーラは私立大学でも講師をしているが、私大のほうでは試験期間になると研究室の前に行列ができるといふ。並んでいるのは学生ではない。同僚の教師だ。親戚や知り合いに頼まれて、単位を与えた

りよい成績を付けてくれるよう、お互いに口利きをしあうのである。デイナーラ自身も、親戚に頼まれたら断れないそうだ。ただし、どの大学でもそれが可能というわけではない。

「私大は質より数を重視しますから、とにかくできるだけ多くの学生を入学させ、さっさと卒業させようとしています。なので親戚の子に頼まれたら、自分が教えている科目の成績はもちろんつけてあげるし、他の先生たちの分もお願いしてあげます。でも国立大ではそうはいきません。私には何もできないわよ、とはつきり断りますね」
なお、デイナーラが強調する国立と私立の違いは、あくまで彼女の個人的経験に基づいている。筆者が調べた限りでは、腐敗の度合いと国立か私立かはほぼ無関係だ。

大学幹部のコネは、より強力だ。若手研究者マラルが以前、大学で教えていたころ、クラスに全く勉強しない学生がいた。誰かから頼まれたのか、学部長はその学生に「四」以上の成績をつけるよう、彼女に要求した。学生は奨学金をもらっており、成績が「三」以下だと受給資格を喪失するから

だ。しかしマラルはこの要求をのまなかった。

「理があるのは私のほうでしたから、学部長もそれ以上、圧力をかけることはできませんでした。結局彼女は代わりに人をみつけて、いい成績をつけさせたんです」

●卒論売ります

学位論文の執筆代行もさかんだ。新聞を開けば堂々と広告が載っているし、お金をもらって博士論文を代わりに書いたことがある、と筆者に打ち明けた人もいる。しかし、元K大教員カルガシユの話にはやや驚かされた。彼女は、自分が指導した学生が卒業論文を買ったのをとがめなかったばかりか、それを一緒に書き直して立派な論文に仕上げたことを自慢げに話してくれたのだ。

「業者をみつつけてきたのは学生本人ですけど、文章を編集したり、卒論発表会のプレゼンテーションの準備を手伝ったのは私です。演出家みたいなものね。結果としてとてもいい発表になりました。成績優秀でも卒論では『四』しかとれなかった学生もいたのに、私の学生は『五』をもらったんですよ」
ちなみに、卒論のお値段は当時

（二〇〇〇年代前半）のレートで一〇〇ドル相当だったとか。前述のハミット（同じK大卒）も卒論を購入しているが、彼が払ったのは五〇〇ドル。専攻や購入ルートなど、価格に影響しうるいくつかの条件が異なっているため一概にはいえないが、卒論の価格は数年間でかなり高騰していることになる。

カルガシユが関与した一件が表面化することはなかったものの、彼女が所属していた学部では、卒論購入の事実が発覚するという事件があった。ある学生の論文の内容が、その前年、他大学に提出された論文と瓜二つだったのだ。なぜこんなことが起こったのか。カルガシユによれば、こうした論文の売買には助手（Laborant）がしばしば関与している。彼らは勤務先の大学に需要があると、似たようなテーマで書かれた論文がないか他大学の助手に調べさせ、コピーを入手して必要な学生に売るのである。

こうした売買自体はよくある話だそうだが、この学生は「買った相手が悪かった」。つまりみつかったしまったのは、コピー元が同じアルマトゥ市内の大学に提出



アルマトゥ市内の学校で、4年生の修了式(撮影:ドスム・サトバエフ氏)

されたもので、しかもあまり時間が経っていなかったためだという。ちなみに卒論を買った学生は結局、無事大学を卒業した。彼女が妊娠九カ月だったことが情状酌量されたものもあるが、教師の大部分が、自分たちの責任問題になりかねないスキヤンダルを公にすることを望まなかったのだ。

カルガシユが卒論の購入に寛容なのは、自分にも似たような経験があるからかもしれない。二〇〇〇年代半ば、彼女が博士号の取得を目指していたとき、毎年一定数の論文をジャーナルに発表せよという条件が課されていた。期限

までにこの条件をクリアできなかった彼女は、三本の論文を一本あたり五〇〇〇テンゲ(四〇ドル弱)で買った。

「業者は新聞広告でみつけたんです。注文する前に論文のサンプルをみせてもらったのだけれど、とてもレベルが高かった。こういうアルバイトをしているのは学者たちですからね。彼らは給料だけでは食べていけないから、副業で稼いでいるんです。それに一本の論文を三人が担当します。単著より共著のほうが、いいものができる。指導教官からも『あなたにもこんないい文章がかけるのね』とほめられました」

●入学するならカネをくれ

義務教育である公立学校への入学でも、袖の下が必要になることがある。

前述の大学教員ディナーラは、校長に心づけを渡すことに成功して、ようやく娘を自宅近くの公立学校に入学させることができた。そもそも住居が学区内にあるので優先的に入れるはずなのだが、最初は定員オーバーで空きがないと断られたのだ。実際、この学校には定員をはるかに超えた数の生徒

がいるそうだが、ディナーラはその理由を「コネや賄賂で子供を入れた人が多いから」と説明する。

自宅から離れた学校に娘を通わせながら、近所の学校の校長に何度も頼んだが、そうしているうちに一年が経ってしまった。送迎の負担に音を上げそうになっていたころ、たまたま再会した元同僚が、自分の娘をその学校に通わせていることがわかり、仲介役をかっててくれた。ディナーラは元同僚の娘の担任教師を通じて、校長に三〇〇ドルを手渡した。二〇〇九年のことだ。

「校長が直接、お金を無心することはありませんでした。私が申し出て受け取らなかったでしょうね。知り合いを通じてでないと、向こうもなにかあったときに不安ですから。三〇〇ドルというのは安いですよ。希望校に子供を入れるために三〇〇〇ドル払ったという話を聞いたこともあります」

入学への謝礼は現金ではなく、備品の購入や改修費用の負担という形をとることもある。
元石油会社社員のヌランは、娘にカザフ語をしっかりと身につけてほしいと考えたのだが、アルマトゥ市内の学校はロシア語で授業

を行っているところのほうがまだ多い。近所の学校はカザフ語で学ぶことができ評判もよかったのだが、それゆえに希望者も多く空きがなかった。

「カネをポンと出して、ほら、これで子供を入学させてくれ、っというわけにはいかないし、校長だって知らない人だと(賄賂を受け取ったりしたら)何かあるかわからないから警戒する。それで校長は、お子さんがここで勉強することになるので、と行って、私に教室をみせ、質のいいリノリウムを張ってもらえませんか、と頼んできた。つまり、リノリウムを張ったら入学させてあげますよ、とほのめかしたんだ」

ヌランはすぐに二人の作業員をみつけ、彼らと学校に行って教室の寸法を測り、必要な道具や材料を買ってから、作業員を校長に引き合わせたそうだ。

●寄付が強制か

右で紹介したように、希望校に子供を入学させるために賄賂を使う場合もあるが、学校関連の費用でより一般的なのは、校舎や教室の改修、備品購入、警備、清掃などを理由に、保護者からお金を徴

収するケースだ。集金の頻度は、同じアルマトゥ市内の学校でも、話を聞いた相手によって、毎月であったり、年に一度だったりとならつきがあった。金額は、月額なら一回につき数百円程度だが、原則として全生徒から徴収するので、学校全体ではかなりの金額に上る。

改修や備品購入を名目とした集金の是非については、保護者の意見は割れている。一方で、学校の予算は限られているのだから、わが子が気持ちよく勉強するためならば多少の出費は仕方がない、という人たちがいる。他方、そもそも公立学校の設備維持には国の予算が割り振られているはずだから、親に負担を求めるのはおかしい、という考えもある。こう主張する人たちは、自分たちが出したお金は、その全額ないし一部が校長のポケットに入っているか、学校予算を着服した穴埋めに使われているのではないかと疑っている。

これ以外に、親たちがクラス担任に自発的にプレゼントを贈る機会も多い。教師の日（一〇月の第一日曜日）、国際婦人デー（三月八日。学校教師は女性が多い）な

どの記念日や祝日、担任の誕生日などに、保護者会でお金を出し合い贈り物をする習慣があるのだ。さらに、個人の判断で直接、心づけやプレゼントを渡す親もいる。

こうした教師へのプレゼントについて意見を聞くと、「たくさんの子供の面倒をみるのは大変なこと」「ちゃんと教えてくれるなら親は喜んで払う」「薄給の教師に金銭的援助をするのを賄賂だとは思わない」と答える人が多かった。ただし、学校や地域によっては、毎回、生徒一人当たり数千テングを集めて教師に渡したり、教師自ら高額な品物を要求したりするケースもあり、負担があまりに大きいと当然ながら反発も出るようだ。

●組織的な腐敗

これまで述べてきた具体的な事例から、カザフスタンの教育分野における不正が、こっそり行われる例外的な行為ではなく、日常的にかつしばしば公然となされていることがわかりただけだ。このことと思う。教育関係者による不正への組織的関与、学生と教師の仲介役の存在、賄賂の相場などは、教育機関における贈収賄が事実

上、制度化されていることを示唆している。

不正が蔓延する構造を理解するために、もうひとつ重要な要因がある。公職の売買だ。

カザフスタンでは、役所、警察、裁判所、税関などの公的機関の職が、しばしば賄賂と引き換えに提供されている。その「購入価格」は公式月給をはるかに上回っているため、職に就いた者は、役職にともなう「非公式収入」によって就職時の出費を取り戻そうとする。またこうした収入は、上司へ上納したり同僚と分け合うことによって、組織内で分配される。

カザフスタンの隣国、キルギス共和国で調査を行ったヨハン・エングヴァルは、腐敗が法の逸脱ではなく事実上の「ゲームのルール」と化している社会においては、公職をカネで買う行為は「国家への投資」だと主張する（参考文献①）。つまり、公的機関のポストは公式・非公式な収入を安定的にもたらす有望な投資対象なのだ。

この見方に立つと、なぜ給与の何倍もの金額を払い、ときには借金までして職を買うのか、その理由が理解できる。公的機関の職員は、薄給による生活苦から賄賂を

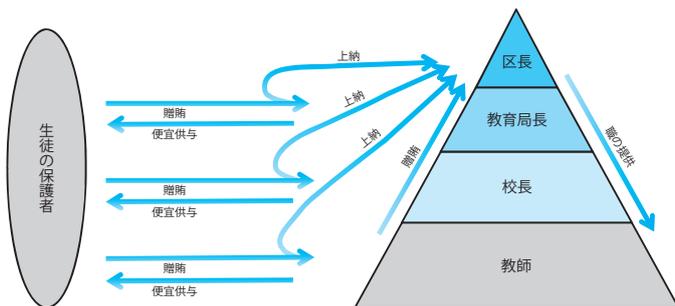
取るのではなく、しばしば「初期投資」を回収するためにカネを集めているのである。また、公職が売られている現状では、その給与が上がれば投資対象としての価値も増す。給与水準の改善は必ずしも腐敗削減の処方箋にはならないのだ。

このような「投資行動」は教育機関においても観察される。ここでは初等・中等教育機関についてみてみよう。教育科学省の地方組織である教育局は、州（およびアスタナとアルマトゥの二都市）、およびその下の区（Raion）におかれており、それぞれ州・区の地方行政府（akimat）の長（akim）の影響下にある（物理的にも同じ建物のなかにある）。

区のレベルについてこれを図式化したのが図1である。校長職は公募だが、その任命権を握る教育局長が、人事や予算配分を通じて校長に影響力を行使する。教師の採用は校長の裁量だ。したがって、教師のポストを非公式に得ようとするなら校長（あるいは教育局長）へ、校長のポストなら教育局長（あるいは区長）へ賄賂を贈る必要がある。

生徒の保護者は賄賂と引き換え

図1 初等・中等教育機関における腐敗システム（区レベル）



(出所) 筆者作成。

に非公式な便宜供与（希望校への入学、成績の水増しなど）を受け、渡す相手は目的や、自分が持っている人脈によって異なる。たとえば、子供を学校に入学させたいときには、校長と直談判するか、教師を仲介役とするほか、教育局にかけあうこともある。この三者のあいだでは、上から下に指示が伝えられ、カネは一部ないしすべてが上納される。

なお、教師は生徒の親から賄賂を取るだけでなく、彼ら自身から搾取される弱い存在でもあり、憤慨していた。

「旧ソ連地域では一〇月の第一日曜日を『教師の日』として祝う慣習があつて、この日にボーナスがでるのですが、二万五〇〇〇テングといわれていたのに、二万テングしかもらえなかつたんですよ。ピンハネ (okrab) です。『五〇〇〇テングはどこにいったの？』と聞いても『あなたには関係ない』といわれるだけ。誰の命令なのかはわからないけれど」

こんな仕打ちを受けても教師たちが黙っているのは、失職を恐れているからだ。

「なぜって、人はめつたにシステム (sistema) に逆らおうとしないから。いずれにしたって、システムがなんでも押しつぶしてしまふ。もし抗議するような人がいたら職を追われるだけでなく、別のところで仕事をみつけるのも難しい。『あの人は苦情ばかりいう人』というレッテルを貼られてしまいますから」

区長のなかには、学校予算を着服する不届き者もいる。前述のアフメトヴァ校長はこう証言する。

「五年ほど前(二〇〇六年ごろ)、前区長のときに校舎の屋根の改修をやりました。改修が必要な学校はたくさんあつて、私のところは一番後回しにされてきました。計画では改修費用は一〇〇〇万テングだったのですが、工事が終わっても銀行口座にまだ一〇〇万テング(約七九〇〇ドル)残っていた。急いで区長のところに行つて、一体どういふことですか、と聞いても黙っているの」

この一〇〇万テングは、区長が自分自身に対する非公式な報酬としてわざと残したものだ。他の校長たちのように、アフメトヴァ氏が渡してくれるのを期待していたのだ。しばらくして、修繕を請け負った会社から区長の意図を聞かされた彼女は、区長に言い放った。

「いままでたくさんの区長と仕事をしてきたけれど、学校予算を節約して私服を肥やそうなんて人は、あなたが初めて」

ちなみにこの区長は後に、収賄で逮捕されたそうである。

なお、大学教師の職を賄賂で手に入れるのは、学校教師よりもハードルが高いようだ。専門性の高さがその一因だろう。しかし収賄こそが組織内のルールであり、それに異を唱えれば組織から排除されかねないという点では、多くの大学も学校と同じである。

● 価値感の変化

払ったという母親はいう。

「息子は親が賄賂を渡したことをもちろん知っていますよ。子供たちはこの『法律』を使えなければ、生きていけないのだから」

健康食品販売の仕事をしているアセリはまだ四〇代なかばだが、もうすぐ七歳になる孫娘がいる。その女の子は一生懸命勉強したが、オール「五」にあと一科目だけ届かなかった。孫の母親、つまりアセリの娘はこれを残念に思い、学校に成績をつけなおしてもらえないか頼んだ。すると学校側は、来年度はしつかりがんばるという約束で、唯一の「四」評価だった音楽を「五」にしてくれたのだという。交渉次第で成績が変わるというのも不思議だが、もっと驚くのは、それを聞いた孫娘のコメントだ。

「ママ、お金払ったの?」

長年にわたり子供の教育に携わってきたアフメトヴァ校長は嘆く。

「(独立後の)二〇年間で、私たちは仕事のできない世代を育ててしまいました。子供たちはまわりが自分のためになんでもやってくれて、いつもお金で解決するのを見て育ってしまったから。そうい

う子供たちは学校を卒業して大学に入っても、賄賂で成績を買うようになります」

学校におけるコネの利用や金品の授受は、ソ連時代にも行われていた。しかし、かつては発覚を恐れ、人に隠れてこっそりとやっていた。また非公式な問題解決の手段としては、賄賂よりも口利ぎが中心であった。お金だけでは手に入れないものが多かった社会主義時代は、相手に便宜を図ることで貸しを作り、必要ときに助けてもらえる関係を築いておくことが重要だったからだ。それに対し、いまでは入学枠、試験の点数や成績、学位論文まで、あらゆるものがお金で取り引きされ、しかもそれがほとんど公然の秘密となっている。

興味深いのは、ソ連時代のほうが公正さ、秩序、プロフェッショナルリズムが重視され、教育レベルも高かったという考えが、比較的若い世代にも共有されているという点だ。中高年世代が「いまの若者は・・・」とぼやくのは、どの社会でも、いつの時代にも繰り返されてきた。しかしカザフスタンでは(おそらく他の旧ソ連諸国も多くにおいても)、いま二〇代後

半の若い人たちがまでもが、自分たちより下の世代は拝金主義的だと考えている。彼らは、自分たちが受けた教育には、理想主義的なソビエト的価値観がまだ残されていたというのである。

●おわりに

とはいえ、ソ連時代には存在しなかった新しい教育の機会も生まれている。一九九二年開校のKIMEP大学(アルマトウ)や、はじめに紹介したナザルバエフ大学は、「世界基準」を強く意識して作られた高等教育機関だ。また公費・自費を問わず、海外留学する学生はますます増えている。冒頭で触れた国費留学制度は優秀な人材を多数輩出しているし、親や親戚が学費を工面したり、自力で奨学金を獲得して国外で学ぶ若者もいる。筆者が日本で出会ったカザフスタンの留学生たちは、みな勉強熱心で才能にあふれ、祖国の将来を真剣に考えていた。

また当然のことながら、カザフスタンの教師や学生・生徒すべてが不正に手を染めているわけではない。自分は決して賄賂を受け取らないという教師ももちろんいるし、不正とは無縁だという評判の

大学も存在する。

さらにいえば、賄賂を払って成績をつけてもらったり、卒業したと打ち明けてくれた元学生たちも、社会人として懸命に働いていた。彼らは、学ぶことに意義を見出せない講義の単位は手取り早く買ってしまったが、仕事に役立つ知識や経験を得ることに熱心であった。

しかしいずれにせよ、いまのカザフスタンの若者の大多数は、幼いころからコネや賄賂の利用をルールとして学んでおり、かつエリート教育や留学とは無縁である。彼らは社会に出るまえから、こうした非公式な問題解決を当然視し、実践しているのだ。教育分野における不正の最も深刻な影響は、「すべてはカネで解決できる」という考えを若い世代に植え付け、結果として腐敗の再生産を促すことにあるといえよう。

(おか なつこ/アジア経済研究所 中東研究グループ)

《謝辞》本稿の執筆にあたり、クアシ・タスタンベコワ氏(筑波大学)に多大なご協力をいただいた。心より感謝したい。ただし

うまでもなく、文中の誤り等はすべて筆者の責任である。

《注》

(1)この調査は Sange Research

Center が三四の公的機関を利用した個人・法人(大学・学校)に關しては個人)を対象に全国で実施した。総サンプル数は五七六〇だが、各機関についての回答者数は一六〇〜一七〇である(参考文献②)。大学・学校以外の公的機関についてのアンケート結果は、参考文献③の表一参照。

(2)カザフスタンの学校は四・五・二の一年制で、うち九年間が義務教育期間とされている(二〇二〇年までに四・六・二の二年制に移行予定)。通常、一学年から一学年までの生徒が同じ学校で一緒に学んでいる。カザフスタンの教育制度については参考文献④を参照。

(3)大通りに面した地下横断歩道では、日用雑貨、文房具、衣類などを扱う売店がしばしば並んでいる。コピーサービスを行う店もある。“Tz 200 proverennykh diplomov v Mangistauskoj oblasti 90% okazalis' poddelkoj.”

2014/08/05. [http://bnews.kz/ru/news/post/220959]

(4)ロシアン (kolledzh) は義務教育を修了した生徒を対象とした二年制の教育機関。

(5)“Sistema kazakhstanskogo vysshego obrazovaniya prevratilas' v bolsheinu barakholku.” 2014/05/19. [http://www.mediasystem.kz/news-kaz/329265?category=15]

(6)参考文献⑤はキルギス共和国の高等教育機関における不正行為を取り上げている。なお、旧ソ連における教育と腐敗に關しては Ararat Osipian や Stephen P. Heynenanらが多くの研究を発表している。

(7)カザフスタン大学協会によれば、国内の大学の授業料平均は年間四〇万テンゲ(約二二〇〇ドル)であった。高額な例では二〇〇万テンゲ近い大学もある。“Preiskurant tsen na vysshee obrazovanie v Kazakhstane.” 2014/07/18. [http://news.mail.ru/inworld/kazakhstan/economics/18916306/]

(8)アフメトヴァ氏によれば、二〇一三年以降、E N T は国家保安委員会と教育学省のスタッフ

の監督下で行われることになり、教師の関与はなくなった。しかしその後もE N Tの解答流出は観察されている(二〇一四年八月、タスタンベコフ氏の聞き取りによる)。

(9)この事例では評価の高さによって賄賂の金額が異なっていたが、金額は一定で評価レベルは教師が決定する、と話す面談者もいた。

(10)具体的時期を確認できていないが、ハミットの年齢などから判断して二〇〇八〜二〇一二年ごろであろう。テンゲの対ドル交換レートは、二〇〇九年二月の通貨切り下げ以前であれば一ドル≒約一二〇テンゲ、それ以降ならおよそ一四七テンゲである。なお二〇一四年二月にも通貨切り下げがなされ、八月現在は一八〇テンゲ程度で推移している。

(11)“Remont v shkolakh vnov' soprovozhaetsia skandalami.” 2014/06/01. [http://rus.azattyq.org/content/remont-v-shkolakh-zhaloby-napobory/25405843.html].

《参考文献》

①Engvall Johan. “Why Are Public Offices Sold in Kyrgyzstan.” *Post-Soviet Affairs* 30(1), 2014, pp.67-85.

②Turisbekov Z., Zh. Dzhandosova, A. Tagatova, and N. Shilikbaeva. *Administrativnye baryery kak istochnik korrupcionnykh pravonarushchenii v sfere gossulzhyb*. Almaty, 2007.

③岡奈津子「カザフスタンにおける日常的腐敗」『アジア研ウォールド・トレンド』第二〇九号、二〇一三年、三七〜四二ページ。

④岩崎正吾「カザフスタン共和国一躍する中央アジアの雄」嶺井明子・川野辺編著『中央アジアの教育とグローバリズム』東信堂、二〇一二年、二六〜三八ページ。

⑤松永裕二「高等教育における公正性確保と質保証—不正行為対策に焦点を絞って: キルギス」嶺井・川野辺編著『中央アジアの教育とグローバリズム』一七二〜一八二ページ。